

37

昭和三十四年二月

高柳会長とマッカーサー元帥及びホイットニー準将
との間に交わされた書翰

憲
法
調
査
会

12855

日本東京都赤坂1の1

憲法調査会

1958年12月1日

親愛なるマッカーサー元帥

貴下は連合国最高司令官としてわが国の憲法の制定に重大な役割を演ぜられましたので、憲法調査会に関心を有しておられることと信じ、その性格と任務について簡単に述べさせていただきます。

調査会は、1956年の法律に基き、1957年の夏からその仕事を始めました。法律の調査会にたいする附託事項は、憲法に関連する諸問題を調査審議し、その結果を内閣を通じて国会に報告することにあります。調査会は、行政組織上は、内閣に置かれていますが、その方針や議事手続は、全く自主的に決定することになっています。いか与て内閣も、いかなる政党も、調査会の仕事に干渉することはできません。

調査会は、昨年8月に発足して以来、次の三つの段階を基礎として、調査をすすめてまいりました。

- (1) ボツダム宣言の受諾から憲法の制定までに至る憲法成立過程の歴史的調査
- (2) 憲法の運用の実際、および憲法の日本の政治的、経済的、社会的生活に及ぼした影響に関する調査

- (3) 憲法運用の実際にかんがみて、自由主義的・民主主義的な政治の健やかな発達をはかるために改正の必要がないかどうかを調査する目的で、憲法の諸規定に検討を加えること

第一の段階は、いわば準備的調査であります。この問題は、数回にわたる総会でとりあげられ、その席上、調査会は、吉田茂、芦田均、金森徳次郎その他種々の段階で憲法制定に直接参画した人たちの証言を聴取いたしました。この調査は、現在小委員会によつて継続されており

目次

1. 高柳会長からマッカーサーへ	(1958.12.1)	1
2. 高柳会長からホイットニーへ	(1958.12.1)	4
3. ホイットニーから高柳会長へ	(1958.12.4)	9
4. マッカーサーから高柳会長へ	(1958.12.5)	11
5. 高柳会長からマッカーサーへ	(1958.12.10)	14
6. 高柳会長からホイットニーへ	(1958.12.10)	17
7. マッカーサーから高柳会長へ	(1958.12.15)	24
8. ホイットニーから高柳会長へ	(1958.12.18)	25

真理のために、アメリカ側から文書たと口頭たとを問わず、資料を収集し、これによつて、日本側から得られた情報を正しい見方から把握する必要があると思います。調査会は、真理の道に奉仕するにはこのような努力を行わなければならない、そしてこのような努力が行われたならば、日本にとつてもアメリカにとつても、相互に利益になるであろうと、痛感しております。

わたくしを長とする調査団は、日本国憲法の制定に当つて何らかの役割を果たした多くのアフリカ人と会見を行つてまいり、これによつて、歴史的事実を正しく把握するのに役立つかなりの情報を入手することができました。今回の旅行は成果のある旅行であり、わたくしたちが日本に持ち帰る情報は、調査会が満足をもつて受けとつてくれることと存じます。

しかし、貴下は、わたくしたちが調査している問題について權威ある情報を握つておられ、わたくしたちの真理の探求に対して大きな寄与をなすことができるということを考えると、わたくしたちが貴下に会見できずに日本に帰るとしたら、わたくしたちの今回の渡米は、不完全なものとなりましょう。

それゆゑ、わたくしたちがニューヨークのアビー・ホテル（ニューヨーク市西51番街、151番地）に滞在している12月5日から12日までの間の貴下の御都合のよろしい時に、わたくしならびにわたくしの調査団と会見下さるようお願い申し上げます。

貴下の御健康をお祈り申し上げます。

拝 具

憲法調査会会長

エル・エル・デイ 高 柳 賢 三

ニューヨーク州ニューヨーク市ウオールドフ・アストリア・ホテル、タワー内

ダグラス・マッカーサ元帥殿

ますが、小委員会は、すでに12回以上の会議を開催いたしました。

第二の問題の調査は、本年3月に始まり、最初に司法をとりあげました。最高裁判所の田中長官はじめその他の判事、前検事総長、多数の著名な弁護士、法律学者などが、参考人として呼ばれました。基本的人権および司法に関する委員会は、この問題について審議を継続しております。調査会の総会は、現在、国会に関する調査をとりあげています。

吉田茂前首相は、調査会会長としてのわたくしにあてた書簡の中で、憲法を早急に改正する必要はないと申しました。吉田氏は、憲法改正のごとき重大事は、かりにそのことありとしても、一内閣や一政党の問題ではないのであり、そのためには相当の年月をかけて検討審議を重ねた上、国民の總意を体してこれに当らなければならないと言いました。

わたくし自身は、吉田氏の見解を全面的に支持するものであります。事実、調査会の調査方針は、これと同じ考え方を急頭において樹立されております。調査会は、政治的見解のいかんにかかわらず、各方面の適任の参考人から証言を聴取しております。調査会の会議は、総会も特別委員会も、一般公衆に公開され、その会議の模様は、新聞に詳細に報道され、一般国民は、大きな関心をもつてこれを読んでいます。会議の速記録は、関心を有する人はだれでも入手することができます。なかんずく、第二と第三の調査段階については、東京以外の各地においても、公聴会が開かれております。この公聴会は、すでに大阪と金沢で開かれましたが、近く名古屋と仙台でも行う予定です。

このたび調査会の調査団がアメリカを訪問した目的は、第一の段階に関して、日本では得られない情報を得ることにあります。調査会は、このような情報が得られれば、誤解や解釈の誤りのある点を明らかにし、正しい事実を把握するのに役立ち、これによつて調査会は詳細な正確を公正な報告を作成することができると思っております。日本の参考人が述べたことの中には、偏見もありませうし、誤報や誤解に基づくものもあると思われます。それゆゑ、調査会は、

問わず印刷された資料を研究し、日本の参考人の証言を聴いた後もお明らかでない点を明らかにすることにあります。わたくしたちはまた、日本の参考人の証言は国民的偏見にとわれていることもあるのではないかと思い、文書たると口頭たるとを問わず当地で収集できる資料によつて、日本の参考人の述べたことが正しいかどうか確認したいと思うのです。

さて、閣下、貴下は日本国憲法の歴史に重要な役割を果たされたのですから、わたくしたちの訪米も、貴下ならびにマッカーサー元帥と会見できなければ、不完全となるでしょう。わたくしたちがニューヨークのアビー・ホテル（ニューヨーク市西51番街151番地）に滞在している12月5日から12月12日まで（両日を含む。）までのいつでも、わたくしならびにわたくしの調査団と会見下されば幸いに存じます。

異例の方法とは存じますが、別添資料二通を同封させていただきます。これは特に説明の要はないと思います。

拝 具

憲 法 調 査 会

会長 高 柳 賢 三

同 封 物

別添資料（二通）

ニューヨーク州、ニューヨーク市

ウオールドフ・アストリア・ホテル、タワー内

コートニー・ホイットニー准将殿

日本東京都赤坂1の1

憲 法 調 査 会

1958年12月1日

親愛なるホイットニー准将

わたくしは、日本大使館の安川氏と貴下との間にとりかわされた書簡を拝見し、わたくしが会長となつている憲法調査会の性格ならびにわたくしたちの今回の訪米の目的を貴下が誤解されているように思われるのは残念です。貴下の誤解は、大使館から貴下に送られた文書の不備——たとえば、エッセンシャル中のやや卒直すぎるような表現や「いわゆる示唆」という言葉が用いられていることなど——によつて生じたものではないかと存じます。あの文書は、わたくし自身が知らない間に作成されたもので、わたくしが目を通してみると、貴下を誤解させるに少なからぬ役割を果たしたものと感じます。

わたくしは、本日付でマッカーサー元帥にあてた書簡の中で、調査会の性格とわたくしたちの訪米の目的を説明しておきましたから、元帥が貴下にその書簡を見せてくれるものと思います。そこで、その書簡に述べたことはくり返さないことにします。ただ、次の二つの点だけは、貴下にはつきりさせておきたいと思います。

- (1) 憲法調査会は、日本において、憲法を反動的に改正するのを支持する人々の集りではありません。調査会が改正に全面的に反対しているものでないことは事実ですが、調査会は、日本国民が、現行憲法の根本概念である自由主義的、民主主義的な政治形態の健全な発展をはかることが可能となるような改正を支持しているのです。
- (2) わたくしたちの今回の訪米は、なんら政治的なものではありません。わたくしたちがまいつたのは、改正に賛成する人々のために証拠を発見するためではありません。わたくしたちの目的は、むしろ学術的なものであります。すなわち、わたくしたちが英文、和文を

は、貴族院帝国憲法改正案特別委員会委員として積極的に審議に参加いたしました。やがて、わたくしは、東京の成蹊大学の学長となり、教授と学生に対して、新憲法の根本となつてい
る自由主義的民主主義の精神と技術を体得させるよう、全力を尽しました。学長の職は、1
957年4月に辞任いたしました。1957年4月憲法調査会が発足する直前に、わたくし
は、調査会委員に任命され、委員の互選により会長に選ばれました。

別添資料第二

貴下がマッカーサー元帥にお会いになりましたら、元帥がわたくしに会見して下さる場合で
も、細かいことで御迷惑をおかけするつもりはないとお伝え下さるようお願いいたします。
わたくしは、例えば、資料を十分に研究した後に得られたわたくしの印象が誤っていないか
どうかを元帥にお尋ねしたいのです。

- (1) 当時の国際情勢を考慮すると、元帥が1946年2月にとつたきわめて迅速な措置は、
日本の福祉に大きな寄与をなした政治的措置であつて、これについては、日本国民は、
マッカーサー元帥に永久に感謝しなければならない。11カ国による共同統治（コンド
ミニウム）が行われたとしたら、われわれは、災害をうけたであろう。
- (2) 天皇制の維持は、マッカーサー元帥によつて最終的に決定されたのであつて、この決
定の責任は元帥にあり、この決定による功績も元帥にある。この決定は、元帥の当面の
責任である占領政策の実施を確保するためには、たしかに賢明な決定であつた。この措
置は、圧倒的に多数の日本国民の支持を得たばかりではなく、その後行われ、今もなお
行われている日本の政体の広汎な改革のただ中において、安定の要素を導入したことと
なつた。
- (3) 多くの議論が行われている第9条については、わたくしは、マッカーサー元帥も幣原

別添資料第一

わたくしの履歴に関する以下の記述は、わたくしが会長をしている調査会の性格を幾分で
も明らかにするのではないかと思います。

わたくしは、1912年に東京大学を卒業すると間もなく、さらに研究を行うため、この
国に渡つてまいりました。わたくしは、ハーバード大学法学部で2年間を費し、主としてロ
スコ・パウンド学部長の下で勉強しました。その後、ノースウエスタン大学法学部で1年
を費し、アメリカ法学界のもう1人の権威者たる故ジョン・H・ウイグモア学部長の弟子と
して研究いたしました。このお2人がわたくしに及ぼした影響は、はかり知れないものがあ
りました。海外留学から帰国後、わたくしは、東京大学で、約30年間、英米法の基礎を教
えました。わたくしは、ロスコ・パウンドの「コモン・ローの精神」を教科書として使う
他、今は古典となつた教授の著書「法律史観」と「法と道徳」の日本訳を出版しました。わ
たくしは、また、旧師ウイグモアがその有名な著書「世界法体系概観」の中で日本の法体系
に関する章を書いていたとき、教授を援助いたしました。貴国に滞在中、わたくしは、基本
的人権の司法的保護に関するアメリカの制度に特に興味をいだき、この問題に関して、一連
の論文を法学雑誌に発表しました。アメリカのこの制度をとり入れた日本の新憲法が制定さ
れた後、これらの論文は、日本の憲法学者のために、単行本として出版されました。193
8年、アメリカの学士院は、わたくしを院の名誉外国人会員に推せんしてくれました。長い
間のアメリカの友人として、わたくしは、わたくしに授けられたこの名誉を、深い感謝の念
をもつてお受けいたしました。

わたくしは、ずっと以前から幣原男爵を知っており、平和主義的、自由主義的な政治家と
して男爵を深く尊敬しておりましたが、わたくしが、新憲法の草案が貴族院で審議される直
前に貴族院議員に任命されたのも、男爵の推せんによつたものと聞いております。わたくし

ザ・タワーズ

ニューヨーク州、ニューヨーク市22

ウォルドルフ・アストリア・ホテル

1958年12月4日

親愛なる高柳博士

12月1日付の貴信を受けとり、同日付でマッカーサー元帥にあてた貴信も拝見いたしました。この二通の書簡に説明されている貴調査会のアメリカにおける意図と目的は、日本大使館の安川氏が11月5日付のわたくしあての書簡の中で明らかにした意図や目的とは、雲泥の差があります。後者は、常識のある人ならば、完全なアメリカの戦後政策に暗に挑戦することによつて意識的にアメリカを非難せんとするものであり、完全な日本国憲法それ自身をもひそかに攻撃せんとするものであると考えるより他ありません。しかし、貴下の書簡によつて、この問題を全く違つた見方で見るができるようになりました。貴下の説明が貴調査会がわが国を訪問する前に行われていたならば、調査会が意見を聴きたいと思つておられるすべての人々の完全な協力を得ることができたであろうと信じます。しかし、このように明らかな食い違いから生じた現在の状態は、とても混乱しておりますので、わたくしは、調査会の活動に参加しないというわたくしの前の決定を変更するのは賢明ではないと思います。いずれにせよ、わたくしは、歴史上の記録に対して何もつけ加えることができないであろうと思います。

わたくしは、わたくしたちが日本国民の幸福をもつともよく増進するような新しい憲法を制定するために一しよに働いていたとき以来、貴下のことよく覚えており、貴下に好感をいだいております。それゆえ、貴下がその後、気ままな改正から憲法を断固として擁護して来られたと聞いても、わたくしは意外には思いません。それは、貴下の愛国心の深さと貴下の

勇断も、日本の基本政策という観点からのみならず、世界全体に実現すべき性式の事態という観点から考えていたものと思う。日本国憲法第9条は、世界各国の将来の憲法の模範となるべきものであつた。さもないければ、人類は、原子力時代において死滅してしまふかも知れない。わたくしは、ロスアンゼルスにおける元帥の雄弁な演説に大いに感動し、元帥が日本政府に対して本条を憲法に入れるように勧めたとき、元帥の心中には他の考慮もあつたかも知れないが、これが元帥の支配的な考えであつたと思うようになった。

以上のきわめて重要な諸点に関する元帥の言葉は、日本国民および調査会に正しく伝えられるであらう。

1958年12月5日

親愛なる高柳会長殿

貴下を会長とする憲法調査会に関する12月1日付のごていねいな貴信を受けとり、興味深く拝見いたしました。ホイットニー准将も、貴下が准将にあてた最近の書簡の別添資料第2に記された三つの質問を見せてくれました。その三つの質問について、貴下は、わたくしから情報を求めておられます。

貴下は、別添資料第2の中で、「わたくし」(高柳博士)「は、例えば、資料を研究した後、後に得たわたくしの印象が誤っていないかどうかを、元帥」(マッカーサー元帥)「にお尋ねしたいと存じます。」と述べておられます。

「(1) 当時の国際情勢を考慮すると、元帥が1946年2月にとつたきわめて迅速な措置は、

日本の福祉に大きな寄与をなした政治的措置であつて、これについては、日本国民は、マッカーサー元帥に永久に感謝しなければならない。11カ国による共同統治(コンドミニアム)が行われたとしたら、われわれは、災害をうけたであろう。

(2) 天皇制の維持は、マッカーサー元帥によつて最終的に決定されたのであつて、この決定の責任は元帥にあり、この決定による功績も元帥にある。この決定は、元帥の当面の責任である占領政策の実施を確保するためには、たしかに賢明な決定であつた。この措置は、圧倒的に多数の日本国民の支持を得たばかりではなく、その後行われ、今もなお行われている日本の政体の広汎な改革のただ中において、安定の要素を導入したこととなつた。

(3) 多くの議論が行われている第9条については、わたくしは、マッカーサー元帥も幣原男爵も、日本の基本政策という観点からのみならず、世界全体に実現すべき将来の事態という観点から考えていたものと思う。日本国憲法第9条は、世界各国の将来の憲法の

高まいる経国の才を物語るものであります。

拝 具

コートニー・ホイットニー

ニューヨーク市西51番街151番地

アビー・ホテル

高柳賢三博士 殿

3. 貴下の印象は正しいものであります。第9条のいかなる規定も、国の安全を保持するのに必要なすべての措置をとることを妨げるものではありません。わたくしは、このことを憲法制定の当時述べましたが、その後10師団ならびにこれに対応する海上、航空部門から構成される自衛隊を設けるよう勧告いたしました。本条は、専ら外国への侵略を対象としたものであつて、世界に対して精神的な指導力を与えようと意図したものではありません。本条は、幣原男爵の先見の明と経国の才とえい知の記念塔として、永存することでありましょう。

わたくしの御援助できることについて他に御質問がございましたら、喜んでお答えいたします。

尊敬の念をこめて

拝 具

ダグラス・マッカーサー

ニューヨーク州、ニューヨーク市

西51番街151番地

アビー・ホテル

高 柳 賢 三 博士殿

模範となるべきものであつた。さもないと、人類は、原子力時代において死滅してしまうかも知れない。わたくしは、ロスアンゼルスにおける元帥の雄弁な演説に大いに感動し、元帥が日本政府に対して本条を憲法に入れるよう勧めたとき、元帥の心中には他の考慮もあつたかも知れないが、これが元帥の支配的な考えであつたと思うようになった。」

わたくしは、今は完全に日本自身の主権の範囲内にある事柄に關して、日本の調査委員会の議事に正式に参画することが適切であるかどうか疑わしいと思いますが、貴下の御質問に対して、非公式に、次のように御回答申し上げます。

1. わたくしが迅速な措置をとつた理由に關する貴下の印象は、正しいものであります。

当時日本の政治情勢は、絶望的なものでした。日本の旧憲法は、多くの点で比較的自由主義的で健全なものでしたが、解釈によつてゆがめられ、戦争の結果世論によつて輕視されておりました。日本の自治機構を維持してゆくためには、新しい憲章を直ちに制定することが必要であつたのです。外人による軍政か自治的な民政かが問題であつたのです。前者を採用せよとする多くの連合国の圧力は強く、それには日本国を破砕しようとする多くの思い切つた考え方が伴つておりました。わたくしの確固とした決意と目的は、このよう強暴な差別的処置を避け、日本の君主制をできるだけ速かに近代的、自由主義的な線に沿つて再建することでありました。日本国民、日本の天皇、日本政府が、あのようになんか支持してくれなかつたら、その結果は、破滅的であつたでしょう。

2. 天皇制の維持は、わたくしの不動の目的でありました。天皇制は、日本の政治的、文化的生存に固有のものであり欠くことのできないものでした。天皇の一身を害し、それによつて天皇制を廢止しようとする悪質な企てが、日本の再建をおびやかす最も危険な脅威の一つとなつていました。

憲法調査会

御健康をお祈りしつつ、

拝 具

憲法調査会

会長 高 柳 賢 三

ニューヨーク州、ニューヨーク市

ウオルドルフ・アストリア・ホテル、タワー内

陸軍元帥 ダグラス・マッカーサー閣下

質 問 事 項

貴下にも興味あることかと存じますが、わたくしたちが、第9条の立案に関して幣原首相の果たした役割について議論していたとき、二つの相異なる意見が出されました。

(1) 参考人のうちのある者は、幣原の経歴に照して考えると、幣原が1956年1月20日貴下と会見した際、幣原は、貴下に対して、日本の軍国主義の復活を防止することが必要であり、日本が進もうとする平和の道を世界に示すことが必要であると語ったのに対して、貴下が心から賛同されたのではないかという意見を述べました。しかし、これらの人々は、この件は、日本の将来の政策の問題として一般的にとり上げられたのであつて、幣原はこのような考えを日本国憲法に法文化するように述べたものではないと考えています。これは、もちろん、推測にすぎませんが、これらの人々の意見は、幣原の閣内その他の場所における憲法改正に関する態度を根拠としております。

(2) 幣原と個人的に親しかつた他の参考人たちは、幣原はこのような考えを憲法に法文化するようマッカーサー元帥に進言したという意見を述べました。これらの人々の意見は、幣

日本東京都赤坂1ノ1

憲法調査会

ニューヨークにて
1958年12月10日

親愛なるマッカーサー元帥

12月5日付のごていねいな貴信をいただき、まことに有りがとうございました。貴信は、きわめて重要な諸点について、わたくしたちを大いに啓発して下さいました。

貴下は、他に質問があれば喜んでお答え下さるとのことですので、お言葉に甘えて、わたくしたちの調査会の会議で論点となつたもう一つの問題についてお教え下さるようお願い申しあげます。

わたくしは、12月13日にニューヨークを出発いたします。貴信は、下記の宛名でお送り下されば、はなはだ幸に存じます。

12月13日から12月16日まで(両日を含む。)

カリフォルニア州、サンフランシスコ4カリフォルニア街346番地

日本総領事館

12月17日から12月21日まで(両日を含む。)

ハワイ、ホノルル

ヌーアヌ通り1742番地

日本総領事館

それ以後

日本、東京

港区、赤坂1の1

日本東京都赤坂1ノ1

憲法調査会

ニューヨークにて

1958年12月10日

親愛なるホイットニー准将

1958年12月4日付のごていねいな貴信、ありがたく拝見いたしました。貴下が、わたくしたちの調査会の性格とわたくしたちの訪米の目的を前よりよく御理解下さったことを知って、うれしく存じます。12月5日には、マッカーサー元帥からも大へんてい重な書簡をいただきました。この書簡で、元帥は、わたくしが12月1日付貴下にあてた書簡の中でマッカーサー元帥にお伝え下さるよう貴下をお願いした三つの質問について非公式な御回答を下さいました。マッカーサー元帥は、ご親切に、「わたくしの援助できることで、他に御質問がございましたら、喜んでお答えいたします。」とつけ加えて下さいました。そこで、わたくしは、もう一つの問題について御教示下さるよう、マッカーサー元帥に書簡を書いております。マッカーサー元帥が12月5日付の書簡で御教示下さったように、貴下も、非公式で結構ですから、三つの質問について御教示下さるようお願い申し上げます。第二の問題と第三の問題は、かなり技術的なものですが、第一の問題は、貴下自身に関するものです。その点については、日本に多くの誤解が存するに思われますので、貴下がはっきりと説明して下されば、そのよう誤解はなくなり、同時に日米両国の友好関係に対しても寄与することになると信じます。

わたくしは、12月12日まで、ニューヨーク市西51番街151番地アビー・ホテルに滞在しています。13日に、サンフランシスコ、ホノルルを経て帰国の途につきます。わたくしの宛名は、次のとおりです。

原自身が、第9条は連合国から押しつけられたものではなくて、日本側から提案されたものであると言ったことを根拠としております。参考人の1人は、冗談をいうといった調子で、閣内の幣原の(保守的な)同僚は、幣原がかれらと話す場合には全く沈黙を守っていたので、欺かれたのだとさえ言っております。

もちろん、どの参考人も、貴下と幣原との間の会談を聞いたわけではありません。会見の日付を考慮し、なかんずく貴下がアメリカ上院で行われた証言を堪案してみると、わたくし個人としては、幣原の考えは憲法改正に関連して貴下に伝えられたものである、ただし、貴下の覚書第2は幣原ではなく貴下が筆をとって書かれたものであると考えております。しかし、これとても、全くの推測にすぎません。貴下だけが真相を語ることができます。それゆえ、次の点について再びお教え下さるようお願い申し上げます。それによつて、わたくしたちの調査会委員の意見の相違は、明らかになることでありましょう。

幣原首相は、新憲法起草の際に戦争と武力の保持を禁止する条文をいれるように提案しましたか。それとも、首相は、このような考えを単に日本の将来の政策として貴下に伝え、貴下が日本政府に対して、このような考えを憲法に入れるよう勧告されたのですか。

12864

べられたとのことです。この貴下の発言とされている言葉は、「政治的再編成」にも、貴著「マッカーサー——かれはわれわれに何を残したか」にもあらわれておりません。松本は、貴下の言葉を次のように解釈しました。「もし日本政府がこのような草案を提示しなかつたら、われわれは、天皇を国際法廷に召喚するつもりである。」松本の言葉は、日本にとって重大な脅威を含むものですが、日本では広く事実と信ぜられております。わたくしは、調査会の会議の席上、ホイットニー准将は、今になつてはつきり分つたことだが、天皇が法廷に呼び出される危険を含んだ当時の国際情勢を単に客観的に説明したのにすぎないのではないかと申したことがあります。

そこで、わたくしは、次の二点について御教示いただきたいと存じます。

1. 「政治的再編成」やマッカーサー元帥に関する貴著には見えていませんが、貴下は、そのようなことを言明されたのですか。
2. もし言明されたとした場合、上記のわたくしの解釈は誤っているでしょうか。

II

貴下は、マッカーサー元帥に関する貴著の中で、第3部(1)軍備撤廃と非軍事化という項目の下に、「降伏後の日本に対するアメリカの初期の政策」(1945年8月29日)に言及されております。

ところで、英国国際事情研究所発行の「国際事情調査——極東、1942年——1946年」(オクスフォード大学出版局、1955年)に、ヒュー・ボートン教授の「連合国の日本占領」という論文が掲載されております。著者は、419-42ページで、日本の軍備撤廃と非軍事化に関する条約について論じています。教授は、こう言っております。

「ドイツに関する基本問題の討議を行つた、1945年12月のモスコウ会議で、ドイツおよび日本の軍備撤廃条約が審議された。このとき、スターリンは、対ドイツ軍備撤廃条約を

12月13日から12月16日まで(両日を含む。)

カリフォルニア州、サンフランシスコ4カリフォルニア街346番地

日本総領事館

12月17日から12月21日まで(両日を含む。)

ハワイ、ホノルル

ヌーアヌ通り1742番地

日本総領事館

12月21日以後

東京都港区赤坂1ノ1

憲法調査会

御健康をお祈りしつつ、

拝具

憲法調査会

会長 高柳賢三

ニューヨーク州、ニューヨーク市

ウオールドルフ・アストリア・ホテル、タワー内

コートニー・ホイットニー准将殿

I

故松本蒸治博士によると、1946年2月13日、外相官邸において、民政局の代表と日本政府の代表が会見した際、貴下は、日本政府が民政局作成の草案に示されたような原則に基く憲法改正案を提示しなければ、「われわれは天皇の身体を保障することはできないと述

とも十分に知っていたのではないかと言っております。この委員は、さらに、マッカーサー元帥は、日本の独立後25年間も4カ国の管理委員会の監視を受けるよりは、幣原の考えを採用して、戦争禁止、軍備撤廃の条項を憲法の中に入れたほうが、日本のために賢明であると考えたのかも知れないと言っています。そこで、わたくしは、次の2点について御説明いただきたいのです。

(1) G・H・Qは、1945年12月モスクーの外相会議で条約案が審議されたことを知っていましたか。

(2) もし知っていたとすれば、マッカーサー元帥は、調査会のある委員が述べた上記のような考慮をされたのですか。

III

現行憲法第9条の草案は、数回改められたようです。

(A) マッカーサー元帥自身のノート

「国家の主権的権利としての戦争を廃棄する。日本は、紛争解決のための手段としての戦争、および自己の安全を保持するための手段としてのそれをも放棄する。日本はその防衛と保護を、今や世界を動かしつつある崇高な理想に委ねる。いかなる日本陸海空軍も決して許されないし、いかなる交戦者の権利も日本軍には決して与えられない。」(「政治的再編成」102ページ)

(B) 1946年2月13日民政局から日本政府に提示された憲法草案

「国家の主権の発動としての戦争は、これを廃止する。外国との間の紛争を解決する手段としての威嚇または武力の使用は、永久にこれを抛棄する。

陸、海、空軍またはその他の潜在的戦力はこれを認めず、交戦権を国に対して与えられることはない。」

進んで受け入れるよう指示した。これは、日本との同様の条約を受諾することも意味していた。ドイツの軍備撤廃に関する連合国の共同管理というこの問題は、1946年7月にバリーで開かれた外相会議で、再びとりあげられた。このとき、ソ連外相モロトフは、軍備撤廃という考えを否定した。対ドイツ軍備撤廃条約にたいするソ連の反対は、日本にたいするこのような条約の不可能であることをも意味した。そこで、アメリカは、日本とのこのような条約案の承認をそれ以上は要求しなかった。この案件は、外相会議の議題からはずされた。

日本の軍備撤廃および非軍事化に関する条約案の全文は、541—543ページに掲載されています。この条約案は、日本の軍備撤廃と非軍事化が引き続き行われるのを保障するために、連合王国、中国、ソ連およびアメリカ合衆国の間で締結されることになっています。この条約案はまた、管理委員会の設置を規定しています。管理委員会は、4カ国で構成され、占領終了後における日本の軍備撤廃を監視する権限を与えられています。この条約の有効期間は、25年間とされていました。日本は、この条約の当事国ではありませんが、日本がこのような取り極めを明示的に承認することが、連合国の日本領土占領を終結させるための必須条件とされていました。

ボートン教授によれば、次のような事実があつたように思われます。

(1) 条約案は、1945年12月のモスクー会議で審議された。

(2) アメリカ合衆国は、1946年の初めに、他の三つの主要連合国に対して草案を配布した。

(3) 条約案全文は、1946年6月21日に公表された。

(4) 1946年7月、この案件は、バリーの外相会議の議題からはずされた。

憲法調査会のある委員は、G・H・Qは占領期間中実施された「降伏後の日本に対するアメリカの初期の政策」第3部(1)は言うに及ばず、12月のモスクー会議で審議された条約案のこ

自然権をも否定しているように解釈されるおそれがあります。(B)でこの文句が削除されたのは、それが理由でしょうか。それとも、何か別の理由で削除されたのでしょうか。

(2) (C)では、「前項の目的を達するため」という文句が加えられています。第2項にこの文句を加えた責任者である芦田均氏は、この文句を用いたことによつて、第9条は、伸略の目的をもつて行う戦争と、武力による威嚇または武力の行使、ならびにこの目的のためにする軍隊の保持は禁止されるが、自衛のための軍隊の保持は規制を受けないという意味になったと述べております。貴下は、「前項の目的を達するため」という文句がこのように解釈されうることを予見せられ、それを考慮した上で承認を与えられたのですか。

(C) 1946年憲法第9条

「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。」

さて、マッカーサー元帥は、1958年12月5日付わたくしあてのごていねいな書簡の中で次のように言っておられます。「第9条のいかなる規定も、国家の安全を保持するために必要なすべての措置をとるのを妨げるものではありません。わたくしは、このことを憲法制定の当時述べ、その後10師団の陸軍とこれに対応する海上、航空部隊をもつて自衛隊を設置するよう勧告いたしました。本条は、専ら外国の侵略を目標としたものであつて、世界に精神的指導を与えようとしたのです。」マッカーサー元帥の解釈は、きわめて政治家たるにふさわしいものであり、常識に合致しており、「それは、われわれが解釈をしてゆく憲法である。」と言つて最高裁判所長官ジョン・マーシャルの警告を思い出させてくれます。マーシャルのこの言葉は、アメリカにおける憲法解釈の指標であると思います。日本の法学者の大部分は、第9条の字句にとらわれすぎて、自衛隊の設置は違憲であると述べておりますが、わたくしは、これとは反対に、マーシャルの言葉を念頭におきながら、マッカーサー元帥が提唱する解釈と同様な解釈を法学雑誌に発表したことがあります。それゆえ、貴下に対する次の質問は、法律専門家だけに歴史的興味のあるきわめて技術的な草案に関する問題であります。

(1) (A)においては、「自己の安全を保持するための手段としてのそれをも」という文句が用いられていますが、(B)では、この文句がなくなっています。この文句は、自己防衛という

ニューヨーク州、ニューヨーク 22

ウォルドルフ・アストリア・ホテル

1958年12月18日

親愛なる高柳博士

12月10日付の貴信を受けとり、早速貴下の三つの御質問に次のようにお答えいたします。

質問第一——1946年2月13日の会議の発言に関する故松本博士の解釈に、貴下が疑いをいただいておりますのは、もつともであります。あの会議でわたくしが発言したことに関する松本博士の解釈は全然間違っています。当時、マッカーサー元帥は、占領行政の実施に当つて、もつとずっと苛酷な——残忍非道とも言ふべき——方法をとるように、一部の連合国政府から強い圧力を受けていました。天皇を主要戦争犯罪人として裁判するように要求する国さえありました。

当時、日本国民は、餓餓線すれすれのところで生存するのを余儀なくされており、マッカーサー元帥がそれを防止するために占領軍の貯蔵品を放出したり、その他元帥が人道主義に基づくものと考えたことを実行しなかつたら、大量餓死は、避けられなかつたでございましょう。元帥自身および日本に対する圧力を軽減するために、元帥は、自らの緊急の義務を履行するとともに日本国民の生活水準を引き上げるような最小限の改革を行うため、迅速な措置をとろうとしたのです。

1946年2月13日の会議が行われた当時は、幣原男爵も当時の外相吉田氏も、このような緊急事態をよく知っていました。吉田氏は、日本国民を保護しようとして、最高司令官と見事な協力ぶりを示しました。天皇に関する発言は、このような情勢の一般的概観という、わたくし内、認識不足な者のためになされたので、重要な改革を促進させるような措置を奨励せんとして行われたのです。これら改革中一番重要なのが新憲法の制定でした。新憲法が制

ニューヨーク州、ニューヨーク市7

チャーチ街90番地、1303室

1958年12月15日

親愛なる高柳博士

12月10日付貴信を受けとり、とりあえず次の御質問にお答えいたします。

「幣原首相は、新憲法を起草するときに戦争および武力の保持を禁止する条項を入れるように提案しましたか。それとも、首相は、このような考え方を単に日本の将来の政策の問題として提示し、貴下がこの考えを新憲法に入れるよう日本政府に勧告したのですか。」

戦争を禁止する条項を憲法に入れるようにという提案は、幣原首相が行つたのです。首相は、わたくしの職業軍人としての経歴を考えると、このような条項を憲法に入れることに対してわたくしがどんな態度をとるか不安であつたので、憲法に関しておそろおそろわたくしに会見の申込をしたと言つておられました。わたくしは、首相の提案に驚きましたが、首相にわたくしも心から賛成であると言うと、首相は、明らかに安どの表情を示され、わたくしを感動させました。

クリスマスをお祝いしつつ

拝 具

ダグラス・マッカーサー

ハワイ、ホノルル

ヌーアヌ通り1742番地

日本総領事館 気付

憲法調査会

会長 高柳賢三 殿

定されなくては、総選挙を行つて戦後の事態に対処するための新しい国会をつくることもできません。マッカーサー元帥としては、憲法の効力を停止するか、憲法の改正を奨励するかという二つの道がありました。元帥は、後の道を選んだのです。

質問第二——わたくしの記憶しているところでは、最高司令部は、1945年12月のモスコ会議または1946年7月のバリー会議で平和条約の案件が議論されたということについては情報さえうけていませんでした。

質問第三——12月5日付貴下あての書簡の中で、マッカーサー元帥は、貴下に対して、憲法第9条の起源について詳細且つ正確な説明をされました。貴下が引用されている同条の民政局案は、この問題に関するマッカーサー元帥と幣原男爵との間の話を反映するような字句を用いてあります。それは、日本政府に提示されるより以前に、マッカーサー元帥が特に承認を与えた字句であります。最終案で修正されたのは、審議を経た後の国会の結論を反映したものです。言いかえれば、マッカーサー元帥が、幣原男爵との会談後最初に書き留めたものは、一般原則の大ざっぱな概要であつて、それが米日両当局によつて慎重に検討された後に、現在の形となつたのです。

以上で問題の諸点は明らかになつたものと信じます。

拝 具

コートニー・ホイットニー

日本 東京港区赤坂1の1

憲 法 調 査 会

会長 高 柳 賢 三 殿

Correspondence between Chairman Takayanagi
and General MacArthur and General Whitney

憲法調査会事務



Commission on the Constitution

12891

1. From Takayanagi to MacArthur	Dec. 1, 1958	1
2. From Takayanagi to Whitney	Dec. 1, 1958	4
3. From Whitney to Takayanagi	Dec. 4, 1958	8
4. From MacArthur to Takayanagi	Dec. 5, 1958	9
5. From Takayanagi to MacArthur	Dec. 10, 1958	11
6. From Takayanagi to Whitney	Dec. 10, 1958	13
7. From MacArthur to Takayanagi	Dec. 15, 1958	19
8. From Whitney to Takayanagi	Dec. 18, 1958	20

COMMISSION ON THE CONSTITUTION
1-1, Akasaka, Tokyo, Japan

December 1, 1958

Dear General MacArthur:

Believing that you would be interested in the Commission on the Constitution, because of the important role you played in the formulation of the Constitution as Supreme Commander for the Allied Powers, I am taking the liberty of describing to you briefly its nature and work.

The Commission commenced its work in the summer of 1957 under an act of Diet, 1956. Its statutory terms of reference are to study and deliberate on various matters relating to the Constitution and to make a report on the results of its investigations to the Cabinet and through the Cabinet to the Diet. The Commission is administratively placed under the Cabinet, but is completely autonomous in establishing its policies and rules of procedure. No cabinet or political party can influence the work of the Commission.

Since the Commission began to function in August last year, it has proceeded to carry out its investigative work on the basis of the following three phases:

- (1) A historical study of the process in which the Constitution was formulated from the acceptance of the Potsdam Declaration to the enactment of the Constitution.
- (2) A study of the practical operation of the Constitution and its effect on the political, economic and social life of Japan.
- (3) An examination of the provisions of the Constitution for the purpose of investigating whether or not there is need for any amendment in order to ensure the sound development of liberal democratic government in the light of its practical operation.

The first phase is a sort of preliminary study. It has been dealt with in seven general sessions at which the Commission took the testimony of such witnesses as Shigeru Yoshida, Hitoshi Ashida, Tokujiro Kanamori and others who directly participated in the formulation of the Constitution at every stage. The study is being continued by a small Committee which already has had more than twelve sessions.

The study of the second phase was begun in March this year, starting with the judiciary. Among the witnesses who were called have been Chief Justice Tanaka and other justices of the Supreme Court, a former Attorney General and a number of eminent practicing lawyers and academic jurists. A sub-committee on fundamental human rights and the judiciary is further continuing its deliberations on the subject. The Commission in general sessions is now taking up the study of the Diet.

In a letter addressed to me as Chairman of the Commission, former Prime Minister Yoshida advised that there was no immediate need to revise the Constitution. He said that constitutional amendment is a serious matter which transcends the policy of any particular cabinet or any particular political party and that if any amendment is to be made it should be done after long and careful deliberation and with approval of the nation at large.

I am in full accord with Mr. Yoshida's view. As a matter of fact the Commission's policy on investigation has been formulated with the same idea in mind. The Commission hears the testimony of various competent witnesses whatever their political views might be. Its sessions, both general and special, are open to the public and its proceedings are fully reported by the press and read with keen interest by the people at large. The stenographic reports of its proceedings are accessible to anyone interested in them. Particularly on the second and third phases of the inquiry, public hearings are conducted in various localities outside of Tokyo. Such hearings have been held in Osaka and Kanazawa and will soon be held in Nagoya and Sendai.

The purpose of the visit of the Commission's study group to the United States at this time is to obtain information relating to the first phase which is not available in Japan and which the Commission feels would be helpful in clarifying certain points on which there may be misunderstandings or misinterpretations so as to get the facts straight and enable it to prepare a full, accurate and impartial report. Some of the statements made by Japanese witnesses are deemed to be prejudiced or based on misinformation or misunderstanding and, therefore, the Commission feels that in the interest of truth it should obtain from competent American sources such data, whether printed or oral, which would help to put the information drawn from Japanese sources into proper perspective. The Commission feels strongly that this effort must be made if it is to serve the cause of truth and that if this is done it will have been in the interest of both Japan and the United States.

From the interviews my study group has had with a number of Americans who has had one part or another to play in the making of the Japanese Constitution, we have been able to obtain considerable information which puts the historical facts into proper perspective. We feel that this has been a fruitful visit and that the information

we bring back to Japan will be received with satisfaction by the Commission.

However, our visit to this country would not be complete if we returned to Japan without meeting you, as you are a source of authoritative information bearing on the subject of our inquiry and could contribute greatly to our search for truth. I hope, therefore, that you will be so good as to meet me and my group at a time convenient to you between December 5 and 12 during which time we will be staying in New York at Hotel Abbey, 151 West 51st Street, New York.

With very best wishes,

Sincerely yours,

Kenzo Takayanagi, LLD
Chairman
Commission on the Constitution

General of the Army
Douglas MacArthur
The Towers
The Waldorf-Astoria
New York, New York

COMMISSION ON THE CONSTITUTION
1-1, Akasaka, Tokyo, Japan

December 1, 1958

Dear General Whitney:

I have seen correspondence between Mr. Yasukawa of the Japanese Embassy and yourself, and feel sorry that you seem to have come to misunderstand the nature of the Commission on the Constitution of which I am Chairman, and the object of our visit. Your misunderstanding may, I presume, have been caused by the unsatisfactory state of the documents sent to you by the Embassy, e.g. rather blunt statement of essentials and the use of "so-called suggestions". Those documents have been prepared without my personal knowledge and when I go over them I feel they have contributed in no small measure to your misunderstanding.

I have explained the nature of the Commission and our object in coming here in a letter of today addressed to General MacArthur and I hope that he will show the letter to you. And so, I will not repeat what I stated in that letter. I want to assure you on two points: (1) The Commission on the Constitution is not a group in Japan supporting reactionary revision of the Constitution. Indeed, it is not absolutely opposed against revision but supports such a revision as will enable the Japanese nation to witness sound development of the liberal democratic polity which is the philosophy of the present Constitution. (2) Our object in coming here is not political at all. We have not come here to find evidence for any group favoring revision. Our object is rather scientific, namely to clear up points which are not clear to us after our study of printed materials, both in English and Japanese, and after hearing Japanese witnesses. We are also afraid that testimony by Japanese witnesses might be colored by national prejudices, and we want to verify their statements by materials, printed or oral, which we can collect here.

Now, dear General, as you have played a very important part in the history of the Japanese Constitution, our visit will be incomplete without an interview with you as well as with General MacArthur. I should be delighted if you will be good enough to see me and my group any time during the period of our stay in New York from December 5 to December 12, both inclusive, at Hotel Abbey, 151 West 51st Street, New York.

Although this is an unusual procedure, I take the liberty of enclosing two attachments which are self-explanatory.

Sincerely yours,

Kenzo Takayanagi
Chairman
Commission on the Constitution

Encl. Attachments (2)

General Courtney Whitney
The Towers
The Waldorf-Astoria
New York, New York

Attachment 1

The following statement regarding my career may throw some light on the character of the Commission of which I am Chairman.

Soon after my graduation from the Tokyo University in 1912 I came to this country further to prosecute my studies. I spent two years at the Harvard Law School and studied mainly under Dean Roscoe Pound. Thereafter I spent one year at the Northwestern University Law School to study as a pupil to another outstanding jurist in America, the late Dean John H. Wigmore. Their influence on me was profound. After my return to Japan from my academic travels abroad I taught at the Tokyo University the philosophy of Anglo-American Law for some 30 years. I published Japanese translation of now classical "Interpretation of Legal History" and "Law and Morals" by Roscoe Pound beside using his "Spirit of the Common Law" as text. I also assisted my older master Wigmore when he was writing a chapter on the Japanese legal system in his well known "Panorama of the World's Legal Systems". During my stay in your country, I became especially interested in the American system of judicial protection of fundamental human rights and published a series of articles in legal periodicals relating to that subject. After the new Japanese Constitution, which adopted that American system, came into being they were published in book form for the benefit of constitutional lawyers in Japan. In 1938, the American Academy of Arts and Sciences recommended me as Honorary Foreign Member of that Academy. As a long-time friend of America I accepted the honor conferred upon me with much appreciation.

I had known Baron Shidehara for many years and had a high regard for him as a peaceful and liberal statesman, and it was at his recommendation, I understand, that I was appointed member of the House of Peers just before the draft of the new Constitution was discussed in that House. I actively participated in the discussion as a member of the special committee of the Constitution of the Upper House. Then I became President of Seikei University in Tokyo and used my utmost endeavors to acquaint both professors and students with the spirit and techniques of liberal democracy underlying the new Constitution. I resigned that post in April 1957. Just before the Commission on the Constitution began its work in August 1957, I was appointed member of that Commission and elected its chairman by the Commission.

Attachment 2

If you meet General MacArthur I hope you will kindly convey to him that in case he grants me an interview I do not intend to trouble him with details. I want to ask him, for instance, whether my impressions formed after due study of the materials are mistaken.

- (1) In view of the international situation then prevailing, his very prompt action taken in February 1946 was a political action which greatly contributed to the welfare of the Japanese, for which they must forever be thankful to General MacArthur. The condominium by eleven nations would have been disastrous to us.
- (2) The maintenance of the Emperor system was finally decided by General MacArthur and he is responsible for and must take credit for that decision. The decision was certainly a wise one for attaining the execution of the Occupation policy which was his immediate duties. It was a step not only supported by the overwhelming majority of the Japanese nation but it introduced an element of stability amidst vast changes in Japanese polity which have been and are being effected.
- (3) As for much talked about Article 9, I understand General MacArthur as well as Baron Shidehara was thinking not only in terms of a basic Japanese policy but in terms of the shape of things which ought to come in the world at large. Article 9 of the Japanese Constitution should serve as a model for the future constitutions of every country in the world. Otherwise mankind may perish in this atomic era. I was much impressed by the General's eloquent address at Los Angeles which led me to think that although other considerations might have been in his mind also, that was his dominant idea when he encouraged the Japanese Government to put that article in the Constitution.

His statement on these highly important points will duly be conveyed to the Japanese nation as well as to the Commission.

THE TOWERS

THE
WALDORF-ASTORIA
NEW YORK 22, N.Y.

December 4, 1958

Dear Dr. Takayanagi:

I have received your note of December 1st and seen that addressed to General MacArthur of the same date. The aims and purposes of your Commission in the United States, as explained in these notes, are as different from those disclosed by Mr. Yasukawa of the Japanese Embassy in his note to me of November 5th as night is from day. The latter could only be construed by reasonable minds as an attempted arraignment of the United States through its implied challenge of the integrity of United States post-war policy decisions and a covert attack upon the integrity of the Japanese Constitution itself. Your notes, however, present the matter in an entirely different light and I am sure that had your explanations initiated the visit of your Commission to this country, it would have ensured the complete cooperation of all whom the Commission might desire to consult. The situation resulting from these obvious conflicts, however, is so confused that I feel it would be unwise to alter my previous decision against participation in the Commission's activities. I could not in any case add anything to the historical record.

I remember you so well and so favorably from the time that we worked together in the fashioning of a new Constitution which would best promote the welfare of the Japanese people. It comes to me as no surprise, therefore, to learn that you have since stoutly defended that charter against capricious change. It bespeaks the measure of your patriotism and the high order of your statesmanship.

Very sincerely yours,

Courtney Whitney

Dr. Kenzo Takayanagi
Hotel Abbey
151 West 51st Street
New York City

December 5, 1951

Dear Chairman Takayanagi:

I have just received and read with interest your courteous letter of December 1st with reference to the Commission on the Constitution of which you are the Chairman. General Whitney has also shown me the three queries contained in Attachment 2 of your recent letter to him upon which you desire information from me.

You state in Attachment 2, "I" (Dr. Takayanagi) "want to ask him" (General MacArthur) "for instance, whether my impressions formed after due study of the materials are mistaken.

- "(1) In view of the international situation then prevailing, his very prompt action taken in February 1946 was a political action which greatly contributed to the welfare of the Japanese, for which they must forever be thankful to General MacArthur. The condominium by eleven nations would have been disastrous to us.
- "(2) The maintenance of the Emperor system was finally decided by General MacArthur and he is responsible for and must take credit for that decision. The decision was certainly a wise one for attaining the execution of the Occupation policy which was his immediate duties. It was a step not only supported by the overwhelming majority of the Japanese nation but it introduced an element of stability amidst vast changes in Japanese polity which have been and are being effected.
- "(3) As for much talked about Article 9, I understand General MacArthur as well as Baron Shidehara was thinking not only in terms of a basic Japanese policy but in terms of the shape of things which ought to come in the world at large. Article 9 of the Japanese Constitution should serve as a model for the future constitutions of every country in the world. Otherwise mankind may perish in this atomic era. I was much impressed by the General's eloquent address at Los Angeles which led me to think that although other considerations might have been in his mind also, that was his dominant idea when he encouraged the Japanese Government to put that article in the Constitution."

While I believe it would be of doubtful propriety for me to formally participate in the proceedings of a Japanese Committee of Investigation

with reference to a matter which is now one wholly within Japan's own national sovereign authority, I am very glad to informally answer your queries as follows:

1. Your impression as to my reason for prompt action is correct. The political situation in Japan was desperate. Its old Constitution, relatively liberal and wholesome in many respects had been so warped in interpretation and so deprecated in public opinion by the results of the war, but a new charter was immediately imperative if the structure of Japanese self government was to be sustained. The choice was alien military government or autonomous civil government. The pressure for the former by many of the Allied nations was intense accompanied by many drastic concepts designed to fracture the Japanese nation. My fixed determination and purpose was to avoid such violent discrimination and to reconstruct Japan's sovereignty along modern and liberal lines as soon as practicable. Had the Japanese people, the Japanese Emperor and the Japanese government not supported me as they did, the results would have been catastrophic.
2. The preservation of the Emperor system was my fixed purpose. It was inherent and integral to Japanese political and cultural survival. The vicious efforts to destroy the person of the Emperor and thereby abolish the system became one of the most dangerous menaces that threatened the successful rehabilitation of the nation.
3. Your impressions are correct. Nothing in Article 9 prevents any and all necessary steps for the preservation of the safety of the nation. I stated this at the time of the adoption of the Constitution and later recommended a Defense Force be organized of ten divisions with corresponding elements of the sea and air forces. The article was aimed entirely at foreign aggression and was intended to give spiritual leadership to the world. It will stand everlastingly as a monument to the foresight, the statesmanship and the wisdom of Prime Minister Shidehara.

If there are any other queries on which I might assist you I would be glad to respond.

With expressions of respect,

Most sincerely,

Douglas MacArthur

Dr. Kenzo Takayanagi
Hotel Abbey
151 West 51st Street
New York, New York

COMMISSION ON THE CONSTITUTION
1-1, Akasaka, Tokyo, Japan

New York
December 10, 1958

Dear General MacArthur:

May I express my deep gratitude to you for your very kind letter of December 5th, which greatly enlightened us as to points of high importance.

Since you were good enough to express your willingness to respond to any other queries, may I again trouble you to enlighten us on one more question which was mooted in the meetings of our Commission.

I am leaving New York on December 13th. I shall be very much obliged to you, if I could receive your letter at the following address.

From December 13th to December 16th, both inclusive:

The Consulate General of Japan
346 California Street
San Francisco 4, California

From December 17th to December 21st, both inclusive:

The Consulate General of Japan
1742 Nuuanu Avenue
Honolulu, Hawaii

Later:

The Commission on the Constitution
1-1, Akasaka, Minato-ku
Tokyo, Japan

With very best wishes,

Sincerely yours,

Kenzo Takayanagi, LLD
Chairman
Commission on the Constitution

General of the Army
Douglas MacArthur
The Towers
The Waldorf-Astoria
New York, New York

- III -

12880

Question

It may interest you that during our discussion of Prime Minister Shidehara's part in the formulation of Article 9 two different opinions were presented.

(1) Some of the witnesses expressed the opinion that during Shidehara's interview with you on January 24, 1946 it is highly probable in view of Shidehara's career that Shidehara spoke to you about the necessity of guarding against revival of Japanese militarism and the necessity of showing to the world a pacific course which Japan intends to pursue and that you heartily supported his idea. But they think that the matter must have been taken up generally as a question of Japan's future policy and that Shidehara did not suggest to put that idea into the new Japanese constitution. This is, of course, mere surmise, but their opinion is based on Shidehara's behavior in the Cabinet and elsewhere in relation to the amendment of the Constitution.

(2) Some other witnesses, who were personally very close to Shidehara, expressed the opinion that Shidehara suggested to General MacArthur to put that idea into the Constitution. The basis of their opinion is that Shidehara himself told them that Article 9 was not imposed by the Allied Powers but originated from the Japanese side. One of the witnesses even said, by way of a subtle joke, that Shidehara's (conservative) colleagues in the Cabinet were deceived through Shidehara's absolute silence about this in dealing with them.

None of the witnesses, of course, heard the conversations exchanged between you and Shidehara. In view of the date of the interview and especially in the light of your testimony before the U.S. Senate, I am personally inclined to the view that Shidehara's idea was presented to you in connection with the amendment of the Constitution, although No. II of your notes were penned not by Shidehara but by yourself. This is again a sheer surmise. Your Excellency is the only person who can tell the true story. So I hope you be good enough again to enlighten us on the following point, which will surely put an end to a split of opinion among our members:

Did the Prime Minister Shidehara propose that when the new constitution was to be drafted, it contain an article renouncing war and the maintenance of an armed force? Or did he merely present such idea to you as a matter of Japan's future policy and you suggested to the Japanese Government to put that idea into the new Constitution?

COMMISSION ON THE CONSTITUTION
1-1, Akasaka, Tokyo, Japan

New York
December 10, 1958

Dear General Whitney:

Many thanks for your very kind letter of December 4th, 1958. I am delighted to know that you now understand better the nature of our Commission and the object of our visit here. On December 5 I also received a very cordial letter from General MacArthur informally enlightening us on the three questions which I asked you to convey to General MacArthur in my letter to you of December 1st. General MacArthur was good enough to add in his letter that "If there are any other queries on which I might assist you, I would be glad to respond". I am, therefore, writing to General MacArthur to enlighten us on one question. May I take the liberty of requesting you informally to enlighten us on the three queries in the same manner as General MacArthur did in his letter of December 5th. The question (II) and (III) are more or less technical, but the question (I) concerns yourself, and since in my opinion much misunderstanding exists in Japan on that point, your express statement will remove such misapprehension and incidentally contribute to the friendly relations between our two countries.

I stay in Hotel Abbey, 151 West 51st Street, New York until December 12th. On the 13th I am starting for Japan via San Francisco and Honolulu. My address is as follows:

From December 13th to December 16, both inclusive:

The Japanese Consulate General
346 California Street
San Francisco 4, California

From December 17th to December 21st, both inclusive:

The Japanese Consulate General
1742 Nuuanu Avenue
Honolulu Hawaii

After December 21st:

The Commission on the Constitution
1-1, Akasaka,
Minato-ku, Tokyo

With best wishes,

Sincerely yours,

Kenzo Takayanagi
Chairman
Commission on the Constitution

General Courtney Whitney
The Towers
The Waldorf-Astoria
New York, New York

I

The meeting of the representatives of the Government Section and the representatives of the Japanese Government on February 13th, 1946 at the Foreign Minister's residence, you stated, according to the late Dr. Joji Matsumoto, that in case the Japanese Government does not propose a draft constitution based on the principles set out in the draft prepared by the Government Section, "We can not guarantee the person of the Emperor." This alleged statement by you does not appear in the "Political Orientation" or in your work on "MacArthur - His Rendezvous with History". Matsumoto interpreted this statement of yours as follows: "If the Japanese Government fails to propose such a draft, we will summon the Emperor before the International Tribunal." The Matsumoto version, which implies a serious threat to any Japanese, is widely believed to be true in Japan. I am personally skeptical of this Matsumoto version. I stated in one of the committee meetings that if General Whitney ever made such a statement, it is more probable that General Whitney was merely explaining objectively the then-prevailing international situation which, as we now clearly see, involved a danger of the Emperor being summoned before the Tribunal.

I should like, therefore, to be enlightened on the following two points.

1. Did you make such a statement, although that is not mentioned in the "Political Orientation" nor in your work on General MacArthur?
2. If such a statement was made, is my interpretation mentioned above mistaken?

II

You refer in your work on General MacArthur at page 259 to the United States Initial Post-Surrender Policy for Japan (29 August 1945) providing under Part III (1) Disarmament and Demilitarization.

Now, the "Survey of International Affairs, The Far East 1942-1946," issued under the auspices of Royal Institute of International Affairs (Oxford University Press 1955) contains an article written by Professor Hugh Borton on the "Allied Occupation of Japan, 1945-7". The author deals on Pages 419-42 with the Treaty of Disarmament and Demilitarization of Japan. He says: "At the Moscow Conference in December 1945, when basic questions concerning Germany were discussed, the draft treaties for the Disarmament of Germany and Japan were considered. At that time Stalin indicated his willingness to accept the disarmament treaty for Germany, which implied acceptance of the similar treaty for Japan. When this question of joint Allied Control over the disarmament of Germany was raised again at the Paris meeting of the Council of Foreign Ministers in July, 1946, the Soviet Foreign Minister, Molotov, rejected the idea. As Soviet opposition to a disarmament treaty for Germany also meant that such a treaty would be impossible for Japan, the United States did not press further for the acceptance of her draft treaty, and the matter was dropped by the Council of Foreign Ministers."

The text of the draft Treaty on the Disarmament and Demilitarization of Japan is found on Pages 541-543. The draft treaty is to be concluded between the Governments of United Kingdom, China, the Soviet Union and the United States to guarantee the continued disarmament and demilitarization of Japan. It provides for the formation of the Commission of Control, to be composed of the four Powers, with authority to inspect Japan's disarmament after the conclusion of the occupation. The treaty was to remain in force for twenty-five years. Although Japan is not to be a party to the treaty, express acceptance by Japan of such arrangement is to be an essential condition to the termination of Allied occupation of Japanese territory.

According to Professor Borton, it seems that,

(1) the draft treaty was considered at the Moscow Conference in December, 1945.

(2) the United States Government circulated the draft to the other three major Allied Powers in the early months of 1946.

(3) the text was made public on June 21st, 1946.

(4) In July 1946 the matter was dropped at the Paris meeting of the Council of Foreign Ministers.

A member of the Commission on the Constitution suggested that it is possible that the G.H.Q. had been fully informed of the draft treaty considered at Moscow in December, to say nothing of Part III (1) of the United States Initial Post-War Policy for Japan, which latter covered the period of the Occupation. He suggested, further, that General MacArthur might have considered it wiser for Japan to adopt Shidehara idea and put a no war and disarmament clause into the Constitution rather than to be subject to inspection by the four power commission of control for a quarter of a century after Japan's independence. So I desire clarification on the following two points.

(1) Was G.H.Q. notified of the consideration of the draft treaty at the meeting of the Council of Ministers at Moscow in December 1945?

(2) If so, were considerations such as suggested above by a member of the Commission ever made by General MacArthur?

III

The drafting of Article 9 of the present Constitution seems to have undergone several alterations.

(A) General MacArthur's own notes:

"War as a sovereign right of the nation is abolished. Japan renounces it as an instrumentality for settling its disputes and even for preserving its own security. It relies upon the higher ideals which are now stirring the world for its defence and protection. No Japanese army, navy, or air force will ever be authorized and no rights of belligerency will ever be conferred upon any Japanese force ("Political Orientation", p. 102).

(E) The draft constitution presented by the Government Section to the Japanese Government on February 13th, 1946:

"War as a sovereign right of the nation is abolished. The threat or use of force is forever renounced as a means for settling disputes with any other nation.

"No army, navy, air force, or other war potential will be authorized and no rights of belligerency will ever be conferred upon the State."

(C) Article 9 of the Constitution of 1946:

"Aspiring sincerely to an international peace based on justice, the Japanese people forever renounce war as a sovereign right of the nation and the threat of or use of force as a means of settling international disputes.

"In order to accomplish the aim of the preceding paragraph, land, sea, and air forces, as well as other war potential, will never be maintained. The right of belligerency of the state will not be recognized."

Now, General MacArthur says in his cordial letter addressed to me on December 5, 1958: "Nothing in Article 9 prevents any and all necessary steps for the preservation of the safety of the nation. I stated this at the time of the adoption of the Constitution and later recommended a Defence Force be organized of ten divisions with corresponding elements of the sea and air forces. The article was aimed entirely at foreign aggression and was intended to give spiritual leadership to the world." General MacArthur's interpretation is quite statesmanlike, is in accord with common sense and reminds one of the warning given by Chief Justice John Marshall who said, "It is the Constitution that we are expounding" which dictum, I submit, is the guiding star of constitutional interpretation in the United States. Contrary to the construction of a majority of Japanese jurists who lay too much emphasis on the wording of Article 9, thus opining that the organization of the Defence Force is unconstitutional, I published, with Marshall's dictum in mind, in a legal journal an interpretation similar to the one advanced by General MacArthur. The following questions put to you, therefore, concern very technical drafting problems of historic interest to lawyers only.

(1) In (A) the phrase "and even for preserving its own security" is employed while in (B) that phrase disappears. That phrase is susceptible of being so interpreted as to deny even the natural right of self-defence. Was that the reason why in (B) that phrase was omitted? Or was the omission made for some other reason?

(2) In (C) the phrase "In order to accomplish the aim of the preceding paragraph" is added. Mr. Hitoshi Ashida, who was responsible for putting that phrase in the second paragraph, said that by the use of that phrase Article 9 came to mean that while it forbids war and the threat or use of force for purposes of foreign aggression and the keeping of armed force for that purpose, the maintenance of armed force for purposes of defence of the country is not prescribed. The change of the text was approved by the Government Section. Did you foresee that the phrase "In order to accomplish the aim of the preceding paragraph" might be interpreted in such a manner and the approval given with that in mind?

90 CHURCH STREET, ROOM 1303
NEW YORK 7, NEW YORK

15 December 1958

Dear Dr. Takayanagi:

I have just received your note of December 10th
and hasten to answer its query:

"Did the Prime Minister Shidehara propose that when
the new Constitution was to be drafted, it contain an article
renouncing war and the maintenance of an armed force? Or
did he merely present such idea to you as a matter of Japan's
future policy and you suggested to the Japanese Government
to put that idea into the new Constitution?"

The suggestion to put an article in the Constitution
outlawing war was made by Prime Minister Shidehara. He said that he
sought the interview with me with reference to the Constitution with
some trepidation as he was uncertain as to what my attitude would be
on such a clause in the Constitution because of my training as a
professional soldier. I was astonished at his proposal but when I
assured him of my complete support, his relief was very evident and very
moving.

With holiday greetings of the season.

Most sincerely,

DOUGLAS MacARTHUR

Dr. Kenzo Takayanagi, Chairman,
Commission on the Constitution,
c/o The Consulate General of Japan,
1742 Nuuanu Avenue,
Honolulu, Hawaii

THE
WALDORF - ASTORIA
NEW YORK 22, N.Y.

December 18, 1958

Dear Dr. Takayanagi:

I have received your note of December 10th and have no hesitancy in replying to the three questions you pose as follows:

Question I - Your skepticism of the version, attributed to the late Dr. Matsumoto, of what was said at the meeting on February 13, 1946 is well-founded. There is no truth whatsoever in support of Dr. Matsumoto's interpretation of anything I may have said at that meeting. General MacArthur at the time, was under strong pressure by some of the Allied governments to pursue a much harsher - even brutal - course in the administration of the occupation. Some even demanded trial of the Emperor as a major war criminal.

The Japanese people at the time were forced to subsist at little more than a starvation level and mass starvation would have been inevitable had not General MacArthur depleted his own military stores to prevent it and otherwise pursued his own concepts of humanitarianism. To relieve the pressure upon him and on Japan, he sought prompt action toward the minimum reforms which would both discharge his own pressing obligations and raise the standards of Japanese life.

At the time of the meeting on February 13, 1946 this critical situation was well known to Baron Shidehara and Mr. Yoshida, his then Foreign Minister whose cooperation with the Supreme Commander in his effort to protect the Japanese was magnificent. Any discussion concerning the Emperor was within the framework of a general review of the situation for the benefit of those less informed and was designed to encourage action toward a speed-up in essential reforms. Foremost among these was the formulation of a new constitution without which a general election could not be held to create a new Diet to meet the post-war situation. General MacArthur's alternatives were either to suspend the Constitution or encourage its amendment. He chose the latter course.

Question II - As I recall, Supreme Headquarters was not even informed of the discussions on the subject of a peace treaty at the Moscow Conference in December 1945 or the Paris Conference in July 1946.

Question III - In his note to you of December 5th, General MacArthur gave you a full and accurate account of the origin of Article 9 of the Constitution. The Government Section's draft of that Article to

which you refer employed language which reflected the discussions between General MacArthur and Baron Shidehara on the subject - language which was specifically approved by the former before it was submitted to the Japanese government. The changes in the final version of this Article reflect the conclusions of the National Diet following its discussion and debate. In other words, what General MacArthur first noted after his conversation with Baron Shidehara was a general principle in rough outline which reached its existing form after considerable study by both American and Japanese authorities.

I trust that the foregoing will clarify the points in issue.

Very sincerely,

Courtney Whitney

Mr. Kenzo Takayanagi, Chairman
Commission on the Constitution
1-1, Akasaka
Minato-ku
Tokyo, Japan